

富士の染色

土田龍太郎

かの種玉庵宗祇おのが發句の良きかぎり選り草紙すくに作りなして、肥後八代の城主相良小次郎に送りしは、周防筑紫の旅より都に還りてほどなきころ、文明十三年のことなりけり。

宗祇發句判詞とて今に遺りたるこの冊子、説きやうさしも詳かならず言少ななれど、ほぼ句ごとに自判の詞を添へたれば、自然齋のおのが作句にこめし深き思ひを伺ひ知らむとせば、かの老のすさびに次ぎて、この冊子をせめて一たび披き見ではあるべからず。

自然齋の記せる判詞、自句自讚のみにてもあらず、用捨さまざまなれども、おのが心になへる句をむねと選り列ねて、連歌初心のともがらの句作りのしるべにやせむとたくめりしにいたり。

句の數百二十にあまれば句がらさまざまなれども、ことに世の人の譽めののしりて宗祇の名をいや高からしめたりし詠作こころ載りたり。左にはとりあへずただ三句ばかり引きてことたれりとやせむ。

世にふるもさらに時雨の宿りかな

遠く見てゆかばかすまぬ春野かな

かすむ夜ぞおぼろけならぬ春の月

佳句なりやいなやとみには定めがたけれども、平らかにてしかもなにとやらむゆかしくおぼゆる句、同じ冊子の内に少からず入りたり。今わきて論あげつらはまほしきは、

白雲そめいろに染色そめいろの山か不二たけの嵩

といへる一句なれど、こは末つかたに載りたり。

宗祇法師みまかりて後、宗長ら師の遺せる發句千六百あまり選りて編みなせし自然齋發句帖の冬の部にこの一句をも載せたり。發句帖にては、

白雲にそめ色の山かふじの嶽

と記せれば、初の五文字判詞とは異なりたり。この五文字、白雲にては一句の意こころにそぐはねば、かならず白雪にと讀まではあるべからず。

時知らぬ不二の高嶺たかねつねに雪をいただけるはさることなれども、冬に入るままになほまた雪の降り積りて、いよいよま白に染め出でたるがごとくにも見ゆれば、げに白雪こそ冬の富士の岳たけの染色なれと云はではあるらむ。かく考へもてゆけば、自然齋發句の表の意こころばかりはおほかたえ辨わかふべし。この釋きやう、目に立つ誤りとはさらになければ一わたりはうべうべしく聞ゆれども、かく語句の表のみに泥なみて、一句の裏のおもしろき一ふしに心づかでやみなましかばなかなかくちをしかりなまし。

染色の山かといへる中の七字、いかにぞやよしありげにて一句の要かなめのごとくにおぼゆればゆめなほざりに見過すまじきにこそ。

ここにいささか比べまほしきは、歌占と云へる申樂能にて作者觀世元雅なりといへり。

この申樂にて脇となれるは加賀白山に住める男なれど、その男の抽ける歌占の文句

北は黄に南は青く東白西紅くれなゐにそめいろの山

とぞ云ひける。仕手なる禰宜渡會家次、この文句を一たび讀むと見るまに

これは須彌山を詠みたる歌に候

と云ひて、たやすく謎を解き明しけり。

そも須彌山とは一世界の中央に聳ゆる巨峰にして、須彌盧蘇迷盧修修迷盧とも記し、また語義をとりて妙高妙光などと呼ぶもまれならず。釋氏の經論たひの類にこの須彌山を説けることいともこちたけれど、今はただ須彌蘇迷盧と呼ぶことあり、またそをわが國にては靈峰富士なぞに擬なぞふることありとばかり知りなばことたらひぬべし。歌占の句、西紅にそめいろの山のそめいろをやがて蘇迷盧に解きて、こは須彌山を詠みたりとたちどころに悟りし渡會家次の心聴きことげにたぐひなし。

宗祇法師、まさにこの渡會某のなせしごとく、染色を蘇迷盧にかけて、冬に入るままにいとど降りくる雪の白妙にいただきの染まりゆく富士の岳を須彌山と見たてたるにやあらむ。はたしてしかりとせば、富士の岳、冬の染色となれる雪の白妙にはゆるにまかせて、つねよりもいや高く淨く尊くおぼえて、文字どほり蘇迷盧すなはち須彌山かと見まがふるばかりなり、といへるが一句の裏の趣きなるにまぎれなきなり。

觀世元雅のみまかりし永享四年は、文明十三年に先立てることほとほと五十年に及べれば、富士を蘇迷盧に擬ふるためしの宗祇法師に始まることわりさらにあるべからぬはいとしるけれど、右の發句のたくみ元雅の申樂によれりとははたえしも定めまじきなり。

さはれもし今、元雅詞章にそひもてゆけば、宗祇發句の趣きおほかた左のごとくにも釋くをうべし。歌占にては西紅に染色と云へれど、今見れば富士の岳、紅ならぬ白に染みわたりたり。おほかた色に染むとは白きものの赤青黄に色變ることをこそさいへ、白妙に輝けるを色に染むとはなかなか云ふまじけれども、富士やがて蘇迷盧なりと見るにつけて、蘇迷盧を染色にかけて云へば、雪の白妙ぞげに富士の染色にてもありけるよとも思ひつきぬべし。かかることただかりその言葉の戯れにすぎぬはさることなれども、これまた宗祇發句の巧みなりとせばおもしろしといはでやはあらむ。

羽衣といひて歌占にまさりて世に弘く知られたる申樂能あれど、その末つかたにて天女が羽衣をまとひて一曲の舞を奏でつつ靜かに空に上るさまを敍ぶるところあり。

落日の紅は蘇迷路の山を映して縁は波に浮島が拂ふ嵐に花降りてげに雪を廻らす白雲の袖そ妙なる

この時、三保の松原のかなたに漁師伯龍の仰ぎ見し富士の高嶺、あたかも黄昏の空に照り映えてうつくしくおごそかなることこの世のものとも思はれざりしなるべし。かかるをりの富士の岳のおのづから須彌山にも等しく見えしはさらにあやしむにたらず。ここに落日の紅は蘇迷路の山を映してと云へるところ、歌占の西紅にそめいるの山と云へるによく通ひたり。

白雪に染色の山か不二の嵩たけ

と云へるをふとうち見るにはさせることなき句なれば、いとも釋きやすきにたれども、まことは蘇迷廬のことなどまでつぶさに考へてはことたらず。かかる發句を見るにつけても連歌の學びの道のはるけくけはしきことせちに思ひやらではあるべからず。

(令和四年四月二十六日受附)